

アメリカン

リリのサモア日記

～シアワセの形は人それぞれ～



ヨーク水砂子

まえがき	3
データ・アメリカンサモア、ツツイラ島情報	4
1 【プロローグ】 ツツイラ島？そんな島は、ありません	5
2 到着翌日	7
著者紹介	9

まえがき

ひょんなご縁からアメリカンサモアで仕事をするようになった時、私が思い浮かべた「サモア」は、「いわゆる南の島」のイメージでした。青い空、白い雲。大海原を渡ってくる涼しい風にヤシの葉が揺れ、穏やかな波が砂浜の貝殻をのんびり転がす、どこまでも平和なリズム。何年も前に出版された、サモア独立国のツイアビさんの箴言集『パパラギ』の本に書かれているとおり、そんな平和な場所で、ノンビリと生き方上手な人々がいる島、というほのかな憧れがあったかもしれません。

そんな私は、サモアが二つの国に分かれていることも知らず、それどころか、私が住む島はアメリカ領の方で、ツイアビさんがいらした島々とは随分勝手が違うということなどは、想像もしていませんでした。

頭の中で描いていた「南の島」とのギャップに驚きおののき、困惑の日々を送ることになった私は、でも、どこまでものんきで優しい島の人たちに恵まれて、「そんなのアリか！」から、「それもアリか...」と肩から力の抜けていく貴重な体験をしていくことになります。

「シアワセの形は人それぞれ」「善なる誤解を持って理解とする」旅先で見つけたこの言葉たちをビリビリと実感したり、よろけたがる心を支えてもらったりする日々でした。

私が島で書き続けていたメモは膨大な数になります。無邪気で乱暴で、少々傲慢な響きがあったり、ふざけて必死で痛みを隠そうとしているのが自分でも丸見えだったり、稚拙なものが多いのですが、その先に透けて見えてくる風景やメッセージも、たくさんありました。メモを読んでいるうちに目の前には太平洋が広がり、耳には波の音がよみがえります。私はすっかり当時の自分に戻って、島の人たちと大笑をしたり、自分に呆れてヒザをついたり、時には怒ったり大泣きしながらの執筆となりました。

島に移住をしたのは2004年。2007年のクリスマスに移民法の関係で米国に居を移してから、島の大家さんが「アンタが帰って来たらいつでも使えるように、と思ってさ」と、敷地内に小さな家を用意してくれています。未だに仕事で島への行き来も多いので、思えば、随分と長いおつきあいとなりました。そして未だに島に行けば驚きの日々が繰り返され、本書には書ききれなかった物語も、まだまだ増えていくのです。

それでは、これから南緯5度の南の島のお話を始めます。まずは島の情報を少し、それから困惑と爆笑、憤慨、それから時々号泣、の私の思い出とともに、アメリカンサモア、ツツイラ島をお楽しみいただければ、うれしく思います。

データ・アメリカンサモア、ツツイラ島情報

■二つのサモア（情報：Wikipedia より一部抜粋）

サモアは南太平洋に位置する諸島だが、西経 171 度線を境に、西側がサモア独立国、東側がアメリカ領であるアメリカンサモア（米領サモア）、と二つのサモアに分かれている。

19 世紀後半、サモア諸島の西側半分をドイツ帝国が、東側をアメリカ合衆国が獲得した。西側の諸島は第一次世界大戦のドイツ敗戦によってニュージーランドによる国際連盟委任統治領となり、第二次大戦後の国際連合委任統治時代を経て、1962 年に西サモアとして独立（1997 年、国名をサモアに変更）。2009 年 9 月 7 日、車線方向を従来の右側通行から左側通行へ変更した。2011 年 12 月 31 日には、標準時を従来の日付変更線の東側から西側の時間帯に移行した。

一方、東側のサモア諸島は今もアメリカ領のまま。車線の変更も日付変更線の移動も行われていないので、車線は右側通行、標準時も日付変更線の東側のままである。距離的には一番近い隣国であるサモア独立国とアメリカンサモアは時差が 24 時間、走行車線も逆という生活習慣の隔たりがある。

一般的に「サモア」と言えば西側諸島のサモア独立国を浮かべる人が多く、日本から青年海外協力隊が派遣されるのもサモア独立国だ。私が住んだのは米領サモアのツツイラ島で、移住した 2004 年当時は、在住登録済みの邦人は私を含めて 5 人だった。

■アメリカンサモアの通貨、言語など

アメリカンサモアの通貨はアメリカドル、主用産業はマグロ缶詰の輸出。公用語は英語だが、住民同士はサモア語を使うことが多い。サモア語はアルファベットを使う言語だが、G の発音は「nG」となる。首都でもあり主要港を持つ Pago Pago は、カタカナではアルファベット読みの「パゴパゴ」と表されるが、現地では「パンゴパンゴ」と発音しないと通じない。

サモア諸島の位置関係

Wikimedia の地球儀を見たように描かれた地図での東西サモア諸島の位置（赤丸部分）。近隣諸国は南洋の島々、ツバル・ウォリスフテウナ・ソシエテ・ニウエなど。日本は左上の端。左下にオーストラリア、ニュージーランドが、右斜め上にハワイ諸島が見える。アメリカンサモアには日本大使館や領事館はないので、ホノルル領事館の管轄になる。

米領サモアへは、ハワイのホノルル空港からパンゴパンゴ行きが週に 2 往復程度、ハワイアン航空によって運営されている。飛行時間はホノルルから 5～6 時間。



1 【プロローグ】 ツツイラ島？そんな島は、ありません

日本を発つまでの日々は神奈川県の港町にいる知人宅で過ごした。早くに実家を失った私は、あちこちで間借り生活をした後で、帰る予定もなく、日本を発つことになった。

アメリカンサモアへはスーツケースだけを持ち込む予定だったが、どうしても手放せない書籍を船便で送ることにした。郵便局を訪れると、白髪交じりの郵便局員が世話をしてくれた。

「アメリカンサモア？ どこですか？ 聞いたことがないなあ。いや、長年、この仕事をやっているんですがねえ。え、ツツイラ島？ ツ... ツ...。そんな島は、ありませんねえ」

「でも、そこへ引っ越すんです、私。『米領サモア』でも見つかりませんか？」

鼻に向かってずり落ちはじめたメガネを人差し指で戻しつつ、彼は顔を上げた。人の良さそうな笑顔。

「え？ お引っ越しなさるの？ それはまた...。研究かなにかですか？」

「いえ、ちょっとしたご縁で、そこで仕事をする事になりました」

「へえ、それはまた、珍しいことですねえ。また、どうして？」

午後の優しい光が入り込む町外れの郵便局には、私以外に客はいなかった。どこから説明したら良いのだろう。

母国にて、自他共に認める恵まれた環境の職場にいた私。いつからかその贅沢な日常に慣れてしまい、文句ばかりが口をつくようになった日々。そんな自分がイヤになり、アパートを引き払って海外放浪を始めた。いろいろあったが、旅先でのご縁をたどって仕事を得的。仕事と恋愛の両方を追いかけるために米領サモアのツツイラ島へ移住をすることにした...

簡単に言えばそういうことなのだけれど、こんな優しい日だまりは、もう一つの風景を引きずり出してくる。そこだけ空が広い、横浜の公園脇。ホテルのラウンジの風景だ。「21 世紀」まであと少し、という年だった。会社員をしていた私は薄い灰色のスーツを着て、細身の人事部長とテーブルを挟んで座っている。テーブルの上には細長いグラスにビールが注がれていて、炭酸の粒が細長く立ち上り続けている。午後の光がラウンジに柔らかな紗をかけていた。

「こんなことを持ち出すのは、こちらが気が進まないんですがね」

人事部長は細いグラスからビールを一口飲んで、続けた。

「あなたのね、その...離婚された、という話なんですが」

6 年間の結婚を終わらせた春のことだった。離婚にあたり、一人での生活を整えるための届出を会社に提出した後、周りがざわつきはじめた。「既婚女性が働きやすい環境を実現させよう」としている職場で、私の離婚はウワサのタネとなったようである。その雰囲気を感じたのか、人事部長が私を呼び出した。社内では「まずいので」、近くのホテルでビールでもいかがですか、と。

要は、表立っては言えないにせよ、会社にはいろいろと「慣習」というものがある。それを理解して行動せよ、という勧告だった。会社員としての生活は長い。「表立っては言えない慣習を理解する」という一言が何を指すのか、私に何を求めているのか、言われなくても想像できてしまう自分が悲しい。それぞれの立場というものも、会社という組織の中で暗黙のうちに求められるあれやこれやも、了解していた。目に見えぬ枠が、私に向かってギュッと狭まった気分。

仕事には慣れていたし、大切に思える仲間にも恵まれていたのだが、しばらくして、私は会社を辞めた。「表立って言えない理由」を尊重するため、というよりは、日に日に大きくなっていく「一体私はここで、何をやっているんだ」「これでいいのか」「本当にいいのか」という自分の声に耐え切れなくなった、と言うほうが近いように思う。

家族がいない生活というのは、孤独と引き換えに自由も大きい。会社を辞め、住んでいる場所も引き払い、一人旅を始めた私。帰りあぐねて海外を歩いているうちに、人生が思わぬ方向へと動き出した。旅先で出会った相手は、マグロ漁船で機関長をしている遠洋漁業の船乗りだった。お互い定住先の無い身、しばらくはメール交換だけのつきあいが続く。そのうち、彼の乗る漁船がアメリカンサモアに寄港し、荷を降ろすことが多いことを知った。船のオーナーが現地で雑務を手伝う助手を探しているが、なかなか行きたがる人が見つからないことも。それなら私が...と口に出したら話が進み、南太平洋の小さな島への引っ越しが決まったのだった。

「あ、ありましたよ。米領サモア」

カウンターの奥に座っていた若い郵便局員が、分厚い本を手にとってきた。

「やあ、よかったよかった。勉強不足、失礼しました。中身はなんでしょう？印刷物だけだったら、安く送れる手段があるんですよ...時間はかかりますがね」

初老の郵便局員は人の良さそうな顔つきどおりの親身さで、身を乗り出して小包を引き寄せ、ハカリに乗せながら言う。

「じゃあ、これから南の島でのんびり生活ですねえ。休みの日なんか、暖かい海は気持ちよさそうだ」

「ありがとうございます」

そう答えた私は、郵便局員の思い浮かべる南の島での生活と同じ風景を見ていたと思う。



いかにも南の島、という風景は日常風景になった。レインメーカー山とウツレイ湾。

2 到着翌日

アメリカンサモアのツツイラ島に向かう便は週に 2 回、ハワイのホノルル空港から夕方に出発する。貿易風に花の香りが漂うハワイより約 6 時間のフライトは、機内が冷蔵庫のように冷えていた。夜 9 時半に到着したパンゴパンゴ空港で飛行機の扉が開くと、湿気をたっぷり含んだ蒸し暑い空気がのしかかってきて、腕時計の文字盤が一瞬で曇った。外に出ると、土砂降りの雨。カサを使う人も、雨だからと小走りになる人もいないので、みんなに習って私もずぶぬれになった。空港の建物へ入っていく直前で、大きなカエルを蹴飛ばした。

移住一泊目はマグロ漁船に滞在したが、翌朝早く、漁船は突如入ってきた大漁のニュースにわく大海原へ大慌てで出ていった。私の引っ越しや新生活スタートを手伝う予定だった相棒や知人も一人残らず、半分パニックになりつつ洋上へ行ってしまった。みんながいつ戻るかは、マグロの漁次第。長ければ半年先だ。

漁船が消えていった水平線から、風が渡ってくる。青い空と空の青を丸ごと飲み込んだ南太平洋の間を渡った風は珊瑚礁の湾にさざなみを描いて、山すそを湾に浸すレインメーカー山を駆け上る。切り立つ山肌の前を、白いトロピックバードが長い尾をしなせながら舞っている。途方に暮れる私のことなどおかまいなく、夢のように美しい大自然だ。

とりあえず、当面の住まいとして手配してあるアパートへ移動してきた。海辺から通りを挟んだ集落にある二階建ての建物で、一階部分が私の住处だ。入り口はガラスドア。入り口を入ってすぐのリビングルームの床はエンジ色と白のリノリウム。四隅に、足がいっぱいある長い虫がコロリと丸まり、山盛りになって死んでいた。その横にバスルーム。風呂桶がないのは想像通りだが、壁から突き出している水道管はシャワーヘッドがついていない。トイレタンクの上には電話線がむき出しだが、その先に電話機はない。台所に行ってみると、設置されているエアコンからニョロニョロとツタが伸び、からみつくものを探している。食器棚の引き出しをあけたら、豆粒のように小さくて薄い卵の殻がいくつか転がった。トカゲかヤモリかがかえった後だろうか。彼らが食べ残したのか、ゴキブリらしき足が数本。ガスレンジは年代物の種火が必要なタイプで、奥の種火をつけてあげるよ、と入って来た近所のおじさんは、ボムツという音とともに髪を焦がした。でも、出てきた顔はニコニコしていた。

寝室はすさまじい散らかりよう。足場をつくろうと物を動かしたら、ムカデが飛び出してきた。南の島のムカデは大きい、とうワサに聞いたが、それは確かに本当だった。20 センチくらいの、はがねのように黒光りするムカデが突進してきたので、近くにあった食器用洗剤をかける。たいていの虫は洗剤には勝てないはずだ。ところが、ムカデはユラユラと洗剤にぬれた半身を立ち上げたので、一瞬、ムカデを見上げたような錯覚に陥る。我を忘れて踏みつぶしたら、近所のおじさんが笑って言った。

「ムカデは共食いだから、つぶすと仲間がいっぱいくるよ」

ここにいる大ムカデには、洗剤や殺虫剤はなかなかきかないらしい。一番良いのはお湯を沸かしてかけること、と教わった。しかし、非常に攻撃的かつ動きの早い大ムカデを前に、「お湯、お湯」とやっている余裕はあるのだろうか？

生活用具は約束どおり用意されていたが、古びたシーツもマクラもシミだらけ。おまけに何もかもカビ臭くて目が回りそう。窓を開けたら、窓ガラスが外れてストンと外に落ちた。安全カバーのついていない扇風機をつけたら、羽根だけブーンと音をたてて部屋の隅へ飛んでいき、壁に当たって落下した。

気を取り直し、食材を買いに行く。最初に入った食料雑貨屋は、何もかも厚いホコリをかぶっており、ろくなものが売っていなかった。ハズレだったか、と車を走らせ、次の場所に入る。ここもだめ。では、次…。どの店も暗くて汚い。少しでもマシな店を、と走っているうちに、アパートがある島の東の集落から、島の西側のタフナ地域までやってきていた。ここは米軍があるので、たいていの品物は揃うと聞いてきたのだが、「たいていの品物」の概念が違ったようだ。

ツツイラ島は火山が隆起してできた小さな南洋の島。やせた土地、急こう配の島で取れる作物は限られており、ほとんどの野菜は海を渡ってやってくる。私が訪れたときは船便到着の直前だったようで、くたびれきった茶色

レタスが 11 ドル、傷だらけのリンゴが段ボール箱の隅に 4 個売れ残っているだけだった。そのかわり、木箱には島で取れるタロイモが山盛り、となりの木箱には、緑色の調理用のバナナ。冷凍コーナーには、縦半分に切られて冷凍された子豚が上を向いて陳列されており、隣には、ニワトリの足先が 12 本、うなだれた感じでパックに詰められていた。その隣によく、見慣れた白い卵を見つけて、ホッとする。

アパートの部屋に戻ると大家さんがいて、ビールを飲んでくつろいでいる。あまりにも自然に私の部屋ですごしている他人、その光景にとまどった。言葉も浮かばずに立ち尽くしていると、大家さんは「飲みたい？」と言いながらビールを冷蔵庫からもう一本取り出して、横っちょの歯でポン！と音を立ててフタをあげ、笑顔で渡してくれたのだった。



荒れ果てた部屋。このまま貸す大家さんは「何でも好きに使っていいんだよ」と誇らしげ。ありがたいと喜んだものの、モノを動かすと巨大ムカデが突進してきて心底驚いた。



アパート前の美しいビーチ

著者紹介



■プロフィール

ヨーク水砂子（みさこ）

ニックネームは「うろこ」

1966年7月生まれ

1989年12月、オーストラリアを2カ月間の一人放浪（生まれて初めての海外体験）

2000年、2年半の海外放浪開始

2004年、アメリカンサモアに移住

2008年、ハワイ生活を経てワシントン州へアメリカンサモアとワシントン州の往復生活

2009年、TEFL（外国語としての英会話教授法）の認定講師に

■著書



『[今日から英語で Twitter](#)』（語研）英文サンプル提供



『[ステキな外国人に恋したら、英語がペラペラになりました](#)』（総合法令出版）

■アメリカンサモア関係でのメディア出演

・雑誌

月刊清流

・ラジオ出演

FM802 『SUPERFINE SUNDAY CITY PLAZA OSAKA GLOBAL TIMES』

九州朝日放送・KBC ラジオ『PAO～N（パオーン）』

■サイト運営

[オンラインで楽しく英会話上達・オンタノブログ](#)

[イメージと例文でおぼえるおしゃべりことば・ボキャファン](#)

[PhraseMix.com](#) の日本語サポートとりまとめページ

[PhraseMix.com](#) の英語ネイティブ講師とのメールマガジン・使える英会話フレーズを毎日お届け"

[写真ブログ・人生は、宝物](#)

■SNS

[Twitter @misakouroco](#) (日・英)

[Twitter @OntanoUroco](#) (日本語のみ)

■外部サイトのサポート

[PhraseMix.com](#) 使える英語フレーズサイト・日本語サポート

[Hello-Konnichiwa.com](#) アメリカ・カンザス州にお住まいの Joanna さん(jo-san)のブログ運営サポート・日本語訳担当

[Fluentli](#) SNS 式多言語習得サイト告知の日本語音声、サイトでの日本語音声担当

[EduLang](#) 英語学習システム・日本語化のお手伝い

[Mac Our Pet Raven](#) アメリカの子供向け本サイト制作、プロモーションのお手伝い

■趣味など

山登り、キャンプ、雪山歩き、バードウォッチング、写真撮影、一人旅が大好き

外が凍てつく冬には、読書、料理（各国）、オペラやバレエ鑑賞なども楽しめます

好き嫌いはありませんが、普段の食事はゆるやかに健康志向

春～秋はルームランナー(Treadmill)の上に机を取り付け、パソコンはゆっくり歩きながら使っています

冬は立って使える高さの机でパソコンを使い、なるべく座り続ける姿勢を避けています

筋トレやエクササイズなどは、もはや趣味の範疇

性格は、熱中・熱血型

油断すると、ダジャレが漏れてきます

■座右の銘

「善なる誤解をもって理解という」

「たとえ小数点以下何ケタになろうとも、ゼロでなければ増えて行く」

「幸せの形は人それぞれ」